



TITLE:

学生の声

AUTHOR(S):

CITATION:

学生の声. Cue 2007, 18: 61-61

ISSUE DATE:

2007-06

URL:

<https://doi.org/10.14989/57919>

RIGHT:

学生の声

「博士課程に進学して」

工学研究科 電気工学専攻 和田研究室 博士後期課程3年 八 木 将 計

早いもので私が博士課程に進学して2年が経ち、現在は、学位論文に向けて準備をととのえているところです。今年度で長かった学生生活が最後になると思うと、感慨深いです。思い返すと博士課程進学については大変悩んだ記憶があります。修士のときには、進学を決めるまで就職活動もしておりました。私自身、漠然としてますが、社会の為になるような仕事をしたいと強く感じており、かねてから、実際のモノの製造やサービスなどの第一線で活躍したいと考えておりました。しかし、情報化が進み、何事も高速化している現代や将来では、そのような最前線に立ち続けるのは、なかなか困難な事だと思います。そこで私は、そのような困難に打ち勝つためには、博士課程での知識や経験が必要になるのではないかと考えました。最終的には、研究に対する知的好奇心、日本経済の状況、社会的に博士が求められることなどを総合的に判断した結果の進学でしたが、私としては、前述のように自分自身のスキルアップが最も大きな決断理由でした。

現在では、国際会議をはじめ発表の機会を多くいただけ、発表のノウハウを学ぶとともに、多数の講演を聞くことができるなど、修士までは得ることができなかった数々の知識と経験を得ることができました。今は、充実した学生生活を送ることができたと思っています。また、私事ではありますが、先日、就職が決まり、来年からは企業に勤めることになりました。来年以降は、当初の希望通りに最前線に立っていけるよう、この博士課程3年間で得たスキルを活かして頑張っていこうと思っています。

「進学した理由」

工学研究科電子工学専攻 木本研究室 博士後期課程2年 登 尾 正 人

2006年4月に博士後期課程へと進学しました。現在、ワイドギャップ半導体SiCを用いた電子デバイス、特にMOSFETの高性能化に関する研究を行っています。

SiCは実用化に向けて（ダイオードなどは既に市販されている）精力的に研究が進められており、大学で基礎研究を続けるか、企業に就職するかで悩んだ時期がありました。しかし、企業では実用化を急ぐあまり、基礎的検討が不十分なまま研究が進められているように感じられることがあります。一方、大学ではもちろん成果も求められますが、納得できるまで自分の研究に取り組むことができます。自由な時間を、自分のペースで、自分の考えを確かめるため費やすことができるというのは博士課程の大きなメリットだと考えました。将来は研究職に就きたいと考えていたことから博士課程への進学を決めました。

博士課程へと進学した理由は他にもあります。修士課程1回生のときにイタリアでの国際学会で発表する機会があり、その場で国内外の研究者と議論できたこと、自分の研究結果が世界中の研究者に興味を持ってもらえたことは素直に嬉しく思いました。より深くこの研究を進めてみたいと感じたことは、博士課程進学の一因でもあります。研究設備が整っていることも、自分の考えた実験ができるということで大きな利点でもあります。一大学の研究室でありながらパワーデバイスの設計、作製ができるということは魅力的です（初めて作製したMOSFETが動作したときの喜びと感動は現在でも忘れることができます）。

博士課程に進学して1年が過ぎました。（自らの意思で進学するものだと思うので）私は博士課程を勉めるつもりはありませんが、このような恵まれた環境で研究ができることは自分にとって大変貴重な経験だと思います。時間がたつにつれて研究、勉強ともにやりたいことは（やらなくてはならないことも）増えてくるばかりですが、これからもマイペースで頑張っていきたいと思っています。